

大分県現代俳句協会句会報

第27号

令和7年4月5日発行

【第二回雑詠句会結果&自薦作品選句号】

第二回雑詠句会 結果発表（選句&選評）

《10点句》

柿落葉掃けばふるさと空っぽに
後悔を奥歯で潰し夏の雲

足立 町子
鎌倉真由美

《9点句》

弾薬庫睨む背高泡立草
八月の父いつもより気難し
納得の胸にストンと心太
緑蔭に言葉生まれるまで座る
敗戦忌生きている者は爪を切る
老いてなお生きる氣力の稲を刈る

佐藤 優美
白土 正江
赤嶺 広史
川西 達子
神 慶子
御手洗豊海

《8点句》

秋立つや虚子の顔して土手に座す
妻となり母となり果て草の花
花サフラン嬉しい時に出る涙
美しきひかりの殺意蜘蛛の糸
弁当の輪ゴムを飛ばす夏の果
入道雲ゴジラの曲で登場す
しんしんとこの世の端に老いて雪
叱られて見た夕焼けの赤い舌
だんだんと透きとおつていく秋の耳
来し方を西日の中に置いて来る
名月や言葉少なな夫という

高橋 玲子
鎌倉真由美
古後 粒勝
高橋 玲子
牧野 桂一
岡村 君香
有村 王志
足立 攝
小野みち子
上田たかし
有永真理子

《7点句》

また一つ更地の増えし墓参かな
「かあさん」の声にふりむく秋彼岸
朝顔や今日の顔競い合ふ
青栗や少年いつも伏し目がち

松廣 李子
有永真理子
豊國 隆信
井上 則子

有村 王志

小野みち子

宮川三保子

本田 圭子

赤峯 友子

林 香澄

時松由美子

時松由美子

豊國 隆信

吉田 素子

埋もれし骨片の哭く原爆忌
水打つも昨日も今日も人の来ず
立花眞由美
佐藤 律子

《6点句》

立ち止まりこの夕焼けを一人占め
早澤まり子
蓼の花わが半生は風の中
足立 鶴男
梯梧咲くおじいの背に残る傷
白土 正江
短夜や不在着信一つあり
赤嶺 広史
自転車に空気を入れて風になる
足立 鶴男
世界地図のためば終るパリ五輪
神 慶子
私だつてときめきたいのよ秋の茄子
天田 泉美

《5点句》

にわか雨軒先借りて虹を見る
足立 鶴男
空の底抜けて雨乞い死語となる
坂本 一光
晩夏なり葉はさみしままの本
安部スエノ
秋茄子を好むほどよき間柄
甲斐加代子
亡き姑にバトン渡され盆の月
佐藤 次江
無花果のトンがる匂ひまだ子供
岡野 紘宣
雲の峰棚田は天に行き止る
河野 洋子
つくばいの月の棲家となりにつけり
高倉 直人
頬染めて割れてなるかと椿の実
時松ヤスコ
沸点を超えて地球の涙雨
河野 則子
じゃんけんで三段上がる秋祭り
松廣 李子
草取りて生涯現役白寿の手
大村 和代
ひからびた蛙掃き出すコンバイン
岡野 紘宣
八十路とて勇氣りんりんサンガラス
河野 洋子
コスモスや倒れしままに咲きはこり
安部スエノ
大夕立噴煙を消し九重山を消し
赤峰佐代子

《4点句》

春昼や母につなぐ黒電話
本田 圭子
毎年はいつかは終る藤寝椅子
神 慶子
蓑虫の糸の一本村に老い
牧野 桂一
遠ざかる靴音夏帯に移り香
立花眞由美

萩に会うはじめは小さき風の道
足立 町子
夕焼やしゃがむ母の背かけ込む子
佐藤 律子
反戦の合図でしようか柿熟るる
上田たかし
よるめけば影もよるめくどんぐり独楽
時松由美子
初めてのタバコは昭和夏の雲
稲田久美子
秋蛭ちよつと赤めのルージュかな
内田トシ子
口実に過ぎぬ自衛と知った夏
坂本 一光
悔やんでも泣いても足りぬ終戦忌
吉田 素子

峽もみじ真赤に染まるまでの夢
甲斐加代子
兄妹で素麺する七回忌
早澤まり子
原爆忌川べりに座す孤独たち
高野小百合
点点点と生きた証の天の川
坂本 一光
ひまわりの真中に戦拡散す
福田 英子
台風が目玉にテープ貼りつける
佐々木 玉
八月のいろよみがへる終戦日
薬師寺裕二
新しき庭下駄にかえ今朝の夏
竹石 末子

第二回雑詠句会 作品集(点盛)

今回の第一回雑詠句会には71名の会員から213句が集まりました。○印の中が採られた得点(点盛)です。作品番号はランダムにシャッフルされていたものを、編集部で作者別に振り直しました。

有村 王志

1 ⑰人生の端に来ていて寒の月

2 ②終活や大樹を伐つて涼むかな

3 ⑧しんとこの世の端に老いて雪

4 かなかなや唄い尽くせず繭の中
岡野 紘宣

5 ⑤無花果のトンがる匂ひまだ子供

6 ⑤ひからびた蛙掃き出すコンバイン

菅 攝子

7 ②山羊乳に時はるかなり夏木立

8 ①浮人形遠く来ている母の唄

9 ②穀象の鳴けば母来る山河かな

菅 登貴子

10 ①八朔やどの黄色とも違う色

11 伝言を刈田に聞くや祖父の顔

12 ②春一番忘れる力湧くごとし

足立 鶴男

13 ⑤にわか雨軒先借りて虹を見る

足立 鶴男

14 東京にもモミジ色づく溪谷が

15 ⑥自転車に空気を入れて風になる

早澤まり子

16 ⑥立ち止まりこの夕焼けを一人占め

17 ①踏み出せばそこにひまわり母の郷

18 ④兄妹で素麺する七回忌

足立 攝

19 ③爪紅やもう帰らないロバのパン

20 ⑥蓼の花わが半生は風の中

21 ⑧叱られて見た夕焼けの赤い舌

宮川三保子

22 ⑬産み立ての卵の温み終戦日

23 ①心に刺さる言の葉や薔薇に棘

24 ①炎天に足場組み立て声交わす

清末ヤヨイ

25 夏の月地球横目で不安顔

26 ①湯あみ終えあおぐ山並月涼し

27 草むしり子草孫草エンドレス

稲田久美子

- 28 ③ 天の川親を探してはぐれ猫
29 ④ 初めてのタバコは昭和夏の雲
30 社交ダンスの苦い記憶や夜の秋

佐藤 優美

- 31 ⑨ 弾薬庫睨む背高泡立草
32 ① 白桔梗遺影の中に生くわが娘
33 ① わが膝の痛みに耐えて百日紅

新志 光夫

- 34 ① 稲の波ふと呼び醒ます詩^{うた}ごころ
35 礼拝に向かふ坂道秋の薔薇
36 ① 昭和の書捲り灯下の秋を読む

古後 粒勝

- 37 ② 捨案山子勞つてゐるし村雀
38 ⑧ 花サフラン嬉しい時に出る涙
39 ① 河童の忌手^{てびさし}庇で見よ日本海

本田 圭子

- 40 ④ 春昼や母につながられ黒電話
41 ⑬ 言い返す言葉飲み込み蜜柑むく
42 ② 明日検査の体軀沈めて夜の秋

佐藤 哲夫

- 43 酷暑ゆえ新札我家を避けており
44 ② 出来過ぎの隣りのトマトはち切れる
45 ② 軽トラが市道を急ぐ秋立つ日

神 慶子

- 46 ④ 毎年はいつかは終る藤寝椅子
47 ⑨ 敗戦忌生きてる者は爪を切る
48 ⑥ 世界地図たたためば終るパリ五輪

永松左世美

- 49 ② 雑草の上に横たふ蛇^{から}の虚
50 光る君へ現を抜かす良夜かな
51 積み損ねのオクラ頑^{かたくな}までになる

高野小百合

- 52 かき揚げの牛蒡の産地はフリッピン
53 デザートのカット西瓜の種も食む
54 ④ 原爆忌川べりに座す孤独たち

大神 愛子

- 55 ② 亡き夫愛した石楠花つぼみかたし
56 ① 流星を探し求めて首痛し
57 秋寂しアルバムめくる若き父母

河野 輝暉

- 58 ③ ごみ袋も生の一部や盆の月
59 ② 追うことも逃げるも知恵や油虫
60 ③ 芒嚙む男に生れし寂しさに

内田トシ子

- 61 有明の月に誓うや亡夫ひとり
62 ④ 秋蛩ちよつと赤めのルージュかな
63 ③ 朝霧や九重連山一跨ぎ

坂本 一光

- 64 ⑤ 空の底抜けて雨乞い死語となる
65 ④ 口実に過ぎぬ自衛と知った夏
66 ④ 点点点と生きた証の天の川

豊國 隆信

- 67 ⑪ 夜字子や母が背を押すにぎりめし
68 ⑦ 朝顔や今日のだけの顔競い合ふ
69 ③ 原爆忌子どもらの詩未来へと

吉田 素子

- 70 ③ 裸の子やつぱりママのひざが好き
71 ④ 悔やんでも泣いても足りぬ終戦忌
72 ⑪ 点滴の落ちる速さで秋になる

藤 万葉

- 73 流灯会万歳の手は何処へ
74 ② 星月夜カンパネラの濡れた髪
75 ① 翠色の夜を転がる虫のこゑ

安部ユリ子

- 76 ① 生ビールおつかれ様と笑う泡
77 月涼し空のリンクに癒されて
78 大河行くごみに紛れて蟻の群れ

高橋 玲子

- 79 ⑧ 秋立つや虚子の顔して土手に座す
80 ⑧ 美しきひかりの殺意蜘蛛の糸
81 ① 夏落葉踏んで母また悲します

御手洗豊海

- 82 ③ 鳴くもよし鳴かぬもともに虫の闇
83 ⑨ 老いてなお生きる気力の稲を刈る
84 ③ 枯すすき明日はあしたの風を待つ

安田 文

- 85 ③ 汗かいて汗かいてこそ一生涯
86 ネットよりつまり絵手紙月涼し
87 ① タラの芽や小さな刺が身を守る

牧野 桂一

- 88 ④ 蓑虫の糸の一本村に老い
89 ⑧ 弁当の輪ゴムを飛ばす夏の果
90 ① 仏足の余白の余命鴟猛る

河野 洋子

- 91 ② 天守閣目差す勢ひ蛇の衣
92 ⑤ 雲の峰棚田は天に行き止る
93 ⑤ 八十路とて勇氣りんりんサンガラス

福田 英子

- 94 ③ 転生欄に蜉蝣もあり丸をする
95 性欄に三択のあり秋茜
96 ④ ひまわりの真中に戦拡散す

井上 則子

- 97 ③ 嫁姑なごむ日もあり葛の花
98 ⑦ 青栗や少年いつも伏し目がち
99 読み聞かす昼寝の座敷南風かすか

123122121 ①実り成し列なす白菜採り急ぐ ⑤類染めて割れてなるかと椿の実	120119118 ②八月や知覧めざすか早田ひな 朝顔や初の一輪パリ五輪 ②父母をのせて飛交ふ赤トンボ	117116115 ①秋暑し疑心暗鬼の米騒動 河原ゆく老人ひとり秋の翳 ③誉められて恥じらうて乙女秋の蝶	114113112 ③新盆をもてなす旧家の代替わり ①修行僧となりて梅干し並びおり 爆発すマグマ飛び出すトマトかな	111110109 ④遠ざかる靴音夏帯に移り香 ⑦埋もれし骨片の哭く原爆忌 ②露けしや写真の母はいつも端	108107106 ②初恋がまた騒ぎだす十三夜 ①さやけしや白きうなじの束ね髪 ⑥私だつてときめきたいのよ秋の茄子	105104103 ③かしましく鳴く蟬もまた地にかえる ①欄干の声ひそかなり遠花火 遠花火音追っかけて闇に入る	102101100 ①軌道車のブレーキ音や啄木忌 ⑤つくばいの月の棲家となりにけり ①政策の鉛筆書きや露時雨	菅 勲	高倉 直人
147146145 ②花野行く後ろ姿の佻しさや 見上げれば古希の秋空刹那なり 遥かなる風車の回る秋の空	144143142 ①幾千夏スフィックスの太き爪 ⑫十三夜言い負けること覚えたり ①秋深む短所に味も見え始む	141140139 ⑥梯梧咲くおじいの背に残る傷 空蟬のすずなり昏い目の兵士	138137136 ②震災の新聞を読む冬の蟻 ⑤沸点を超えて地球の涙雨 距離間をはかりて飛び立つ赤トンボ	135134133 ⑤秋茄子を好むほどよき間柄 ④峽もみじ真赤に染まるまでの夢 ③合鍵を残し空蟬消えしまま	132131130 ⑤晩夏なり葉はさみしままの本 ①草いきれ草刈る人も飛ぶ虫も ⑤コスモスや倒れしままに咲きほこり	129128127 ④うかつにも潤目鰯と目を合わす ③つつかれて現世にもどる梅雨の蝶 ⑧だんだんと透きとおっていく秋の耳	126125124 ①平和とて一期一会夜わの月 鶯や炎天の空吹き渡る いずれかの鳥のないてる朝の雲	小野みち子	加藤 征孝
171170169 ①一陣の風の連れ去る残暑かな ①先人の空石積みや秋耕す	168167166 ⑧妻となり母となり果て草の花 ⑩後悔を奥歯で潰し夏の雲 ①刈田風蒸れた男の匂いして	165164163 ①父との縁うすかりし墓参かな ②鬼灯やふと魂合へば母のこゑ ④八月のいろよみがへる終戦日	162161160 ⑨納得の胸にストンと心太 ⑥短夜や不在着信一つあり われら同輩霞の端で古希となる	159158157 ②一風に生きた心地の田草取り ⑤草取りて生涯現役白寿の手 ①波間から珊瑚も照らす大夕焼け	156155154 ④萩に会うはじめは小さき風の道 ⑩柿落葉掃けばふるさと空っぽに ③長月の空き家にほつと灯が点る	153152151 ⑦また一つ更地の増えし墓参かな ⑤じゃんけんで三段上がる秋祭り ①原罪は等しく背中に遠花火	150149148 ②横たわる笹に山女魚のひとり言 ③星月夜渡り廊下のきしむ音 ④台風の目玉にテープ貼りつける	松廣 李子	佐々木 玉
時松ヤスコ	幸谷 恵子	林 香澄	白土 正江	河野 則子	甲斐加代子	安部スエノ			
田代 直之	鎌倉真由美	薬師寺裕二	赤嶺 広史	大村 和代	足立 町子				

- 195194193 ⑨緑蔭に言葉生まれるまで座る
③盆の客に交じりて夫も義母もいる
③ビル育つ空へ空へと秋暑の街
- 192191 ①迎え灯を灯して消して盆が行く
②青春の蜜豆食べた街さびし
- 190 山里の祭り 殿^{しんがり}火花咲く
- 189188187 ④よろめけば影もよろめくどんぐり独楽
⑫天高し消してはならぬ好奇心
⑫片陰や吾の一步と母の二歩
- 186185184 ①日蓮や事あるの日に御難餅
②鏡台に傷の飴色秋彼岸
川に出て釣瓶落しをいとをしむ
- 183182181 ③ネオンよりパセリが一つ狩行逝く
①西日落つ島の戦跡みな仏
②水脈の果て蟹かつかつと兜太の詩
- 180179178 ④反戦の合図でしうか柿熟るる
③行く夏の声を溜めてる廃校舎
⑧来し方を西日の中に置いて来る
- 177176175 ③二本目は一人で持つよ初花火
⑧入道雲ゴジラの曲で登場す
②ママチャリの背なに西日や登り坂
- 174173172 ④夕焼やしやがむ母の背かけ込む子
⑦水打つも昨日も今日も人の来ず
②置かれた場所に咲くと決め落葉踏む
- 佐藤 律子
岡村 君香
上田たかし
下司 正昭
森山 秀子
時松由美子
志賀 文子
川西 達子

- 196 ⑤亡き姑^{はは}バトン渡され盆の月
198197 ①逢いたくて線香火花パチパチと
ヨードン大歓声や秋高し
- 199 ①星の数ほどのあれこれ母の夏
200199 ②出がらしにもやれることあり梅雨の明け
201 ①大夕立噴煙を消し九重^{やま}山を消し
- 202 ①思い出のまたひとつ消え夏に入る
203 ②段畑に人影のあり初蛩
204203 ④新しき庭下駄にかえ今朝の夏
- 佐藤 次江
赤峰佐代子
竹石 末子

第二回雑詠句会の選句と選評 Ⅱ到着順Ⅱ

- 205 ①木花咲耶姫が舞い降りてより青田
206 ⑬ひらがなで語る八月青い空
207 ③送り火や父母をかえして後の熾^{おき}
- 208 ⑦「かあさん」の声にふりむく秋彼岸
209 ②雲ゆたり残暑は去ると告げていく
210 ⑧名月や言葉少なな夫という
- 211 ①C T・転移無くクラス会臨みたし
212 何時迄も見たし鶴鴒啄む庭
213 ①秋アカネちさき庭命灯し滑る
- 赤峯 友子
有永真理子
後藤 茂

第二回雑詠句会の71名213作品を、72名の選者で選句しました。今回のゲスト選者は、山本悦子さん、大下真理子さん、夢野はる香さんの三名です。(いずれも天籟通信所属)

牧野 桂一 選

【5・31・70・72・80・96・150・165・176・206】
70棵の子やつぱりママのひざが好き

(吉田 素子)

ママのひざの上でやんちゃにいばっている裸の子が目にとびこんでくる。はちきれんばかりの裸の子のいのちがまぶしい。

改めて俳句の魅力を教えられた一句である。自分の俳句もここに返ることができるかと思えば、いのちをふきかえすことができるかも知れない。「初心忘るべからず」ということばをもう一度胸に刻み直したいと痛感させられた新鮮な一句である。

菅 攝子 選

【12・41・88・129・152・155・158・160・188・206】

佐藤 優美 選

【2・28・42・65・67・93・110・166・189・206】
189片陰や吾の一步と母の二歩

(時松由美子)

年老いた母と一緒に歩いている作者、自分が一歩進むたびに歩幅の小さくなったお母さんがチョコチョコと急ぎ足で歩いているのに気付いて、時々足を休めている様子がわかります。そのやさしい思いやりがなんともいえず、感じられて胸の中が暖かくなります。私も、膝や股関

節を人工にしている歩いて歩くのが遅く、かつしんどくなりました。

宮川三保子 選

【15・22・79・94・110・120・139・140・164・175】
140 梯梧咲くおじいの背に残る傷

(白土 正江)

沖縄の県花である梯梧の花が咲く夏。祖父の背中の傷は激戦の沖縄戦で戦った傷あとと思う。優しい表現の中に戦争のおぞましさを感じる。方言が利いていると思った

下司 正昭 選

【31・65・67・96・153・165・206】
65 口実に過ぎぬ自衛と知った夏

(坂本 一光)

十数年以上昔の事、自衛隊別府駐屯地の祝賀行事に首長の代理として出席した事があった。その会場で東京からの幹部が威勢のよい講演をした。私はそれを聞いて彼等は本気で戦争をやりたいがっているなど感じ、背筋が凍る思いがした。その内容は詳しくは覚えてないが、憲法九条を完全に無視したイージス艦を中心とした、戦闘論であった。それ以来私は反戦平和の句を詠むようになった。仮に台湾有事があっても日本を第二のウクライナにはならない。

生野 義晴 選

【6・23・38・59・67・72・79・169・177・187】
59 追うことも逃げるも知恵や油虫

(河野 輝暉)

油虫の生態をじっくり観察しているからこそ

この一句が成立しているのだと思います。退治をすべく追いかけても、人の気配を瞬時に感じて逃がれる油虫の俊敏な動きにはいつも驚かされています。追いかけても無駄だと思わせる油虫は、本能的に生き抜く知恵が備わっていると思えてなりません。私だけでなく多くの方が、「本当にそうだな」と共感を寄せられると感じます。日常のどこの家庭でも見られる光景を的確に表現していますね。

永松左世美 選

【3・20・41・83・97・108・112・127・160・194】

河野 則子 選

【15・21・41・58・64・89・109・127・164・167】
21 叱られて見た夕焼の赤い舌

(足立 攝)

夕焼は朝日と違い心の抛り所が一步間違えば精神的にも自分に負ける光景である。同じ赤の色のミスマッチが面白いが、本当のこの句を理解するには時間がかかった。

夕焼は美しいばかりではなく、作者の心情を思う時、悲しくなつて西の空を見上げた事も思ひ出した。「赤い舌」が難解であるが故に魅力を感じた一句です。

菅 登貴子 選

【7・9・22・66・68・118・133・135・139・193】

小川 良子 選

【1・13・63・76・83・97・133・144・161・165】

河野 輝暉 選

【1・5・7・12・46・72・89・143・166・179】
12 春一番忘れる力湧くことし

(菅 登貴子)

「忘れる力湧く」に魅了された。憶える力、なら分かるのだが、忘れる、のに力が要るというパラドックスは俳句的表現の粹ではないか。例えば仏道の説く六道の立ちはだかる現世に於いて、「諦める」ことは幸福への理性であろう。横田さきえ氏の果しない煩悶を思う。春一番、も麗らかな春風に非ず。玄界灘で漁る漁師に脅威。避けられぬ天然現象を受容(諦め)して乗り越える強さを要する。人生哲学を平明な言葉で音調よく結んだ秀句。

内田トシ子 選

【5・29・89・93・98・122・127・143・159・187】
93 八十路とて勇氣りりんサン格拉斯

(河野 洋子)

自転車に乗っているのでしょうか？ユーモアに富み、同じ八十代として私もお洒落を忘れず頑張ろうと元氣をもらい楽しい気分です。

天田 泉美 選

【15・32・40・41・67・157・166・189・206・207】
206 ひらがなで語る八月青い空

(赤峯 友子)

私は、八月を広島や長崎の原爆の日と終戦の日と続く痛みと悲しみと思った。昭和がだんだん遠くなり語れる人もいなくなっていく。私が何を語れる訳でもないが、このままでずっと平和であってほしいと思う。「ひらがなで語る」の

「語る」は幼い子どもたちにも優しく分かりやすく話し伝えているのだらう。この普通の日常が…この穏やかな青い空が、ずっとずっと続くように、人が争い傷つくことは無くならなければいけない……と。

岡野 紘宣 選

【1・29・46・80・131・151・160・176・189・204】
46 毎年はいつかは終る藤寝椅子

(神 慶子)

背中を丸めて居眠りする高齢の母を想像します。夏休みに帰省した子供の視点から詠んだと解釈しました。

立花真由美 選

【3・47・60・88・98・127・129・143・189・208】
47 敗戦忌生きている者は爪を切る

(神 慶子)

今を生きている者は伸びた爪を切る時自分が生きて過ごした時間を可視化できます。どの戦争にも多くの人の無念の死があります。一人一人に生きてきた物語があります。「敗戦忌」の季語の背景にある計り知れない悲劇を一言も表現せずに何気ない日常の「生きている者は爪を切る」と詠んだところが簡潔であるため奥深い。

神 慶子 選

【1・31・40・81・94・129・134・160・178・193】

佐藤 次江 選

【1・17・41・64・79・83・127・154・161・180】

藤 万 葉 選

【67・80・82・88・106・133・152・154・176・193】
80 美しきひかりの殺意蜘蛛の糸

(高橋 玲子)

蜘蛛の糸は太陽に照らされキラキラとひかる。雨の後など糸の雫は水晶のように美しい。その糸にかかる獲物を密かに待つ蜘蛛の存在が殺意という言葉で表現されているのに、ぞくつとさせられる。

大神 愛子 選

【1・18・42・91・137・149・163・177・187・213】
18 兄妹で素麺する七回忌

(早澤まり子)

兄妹で無言で亡き人の七回忌の供養をされている姿が目につく。そして供養の後、無言ですする素麺が、哀しみを感じた一句でもあり、私と重なってみえる句での心が通じた一句です。

坂本 一光 選

【3・22・44・47・98・127・166・172・174・199】
174 置かれた場所に咲くと決め落葉踏む

(佐藤 律子)

「落葉踏む」私には前もつての決意はなかったが、気がつくと「こぼれ種咲いて私はここにいる」と句を詠む境地に行き着いていた。十年ほど前のことであつた。そしてまた、「転がったここに住みつく石一つ」という川柳を知った。井上剣花坊の娘、大石鶴子の作。剣花坊は、今年創刊百周年を迎える「川柳人社」発行『川柳人』の祖で、鶴彬を庇護したことで知られる。「置かれた場所に咲く」とは、偶然を必然にし

て人は咲く、ということであるだろうと思った。

高倉 直人 選

【38・62・68・72・92・127・161・167・193・206】
127 うかつにも潤目鰯と目を合わせる

(小野みち子)

鮮魚コーナーで夕食の献立を考えていたら、何やらこちらを見ているような視線を感じた。振り向けば鰯とぼったり目が合ってしまった。ここで勝負が決まりました。うかつにも涙目の鰯と目を合わせたことで、もう買わざるを得ない状況になってしまった。日常生活の一端を切り取った感性が素晴らしいと思いました。「うかつにも」の巧みな措辞が愉快で楽しめました

早澤まり子 選

【2・3・34・54・71・79・143・151・167・192】
54 原爆忌川べりに座す孤独たち

(高野小百合)

私達が忘れてはいけない原爆。広島と長崎の方達が犠牲になりました。時代の変わりをよく言われますが、この事は先の戦争と共に後世の人にも、伝えなくてはいけないと思います。ここに作者の気持を感じます。

足立 攝 選

【8・54・85・89・108・129・130・154・207・208】
108 私だつてときめきたいのよ秋の茄子

(天田 泉美)

こんな作品があると、「ときめきたい」主体は秋の茄子なのか、それとも「この私」なのかと議論になることがある。要するに「秋の茄子」

の前に切れが入るのかどうかであるが、どちらも正解である。理論性より情緒性に優れる日本語の特質というほかはない。しかしどちらの解釈でも、結局は同じ意味になる。「私だつて：」を茄子のセリフと捉えたとしても、「この茄子は私です」と最後に置けば、茄子の心境はイコール自分の思いになるからだ。

それはともかく、弾むような日本の収穫の秋において、地味で無骨な秋茄子のこのぼやきには、思わず「なるほど」と唸ってしまう。

207 送り火や父母をかえして後の熾おき

(赤峯 友子)

迎え火の中で、父と母が胡瓜の馬に乗って帰ってきた。そしてお盆のつかの間、一家団欒の昔の記憶のままに楽しい時間を過ごし、いま別れのときが訪れた。送り火の揺れる炎の中、茄子の牛に乗り遠ざかる父と母。かけがえのない思い出、幸福な日々。それらの余韻に浸っていると、送り火はすでに燃えつきようとしている。

消えかかった松明の芯にかすかに残る赤い輝き——それが熾である。この熾こそが、父と母が実在した確かな証であるとともに、私の原点でもある。「熾」の形象化がすばらしい。

田代 直之 選

【1・3・22・68・72・110・150・155・167・182】
22 生みたての卵の温み終戦日

(宮川三保子)

「卵の温み」と「終戦日」の取り合わせに二物衝撃の相乗効果を覚えた。作者は産みたての卵が今までの卵よりも一層温みがあることを掌

で感じているのだ。それは戦争が終わったことの喜びや生きる希望が心底湧いてきてそれらが混ざり合って熱量となり、掌の温もりとなり、生みたての卵の温みを包み込んでいる。平和を願う温もりなのだ。

足立 鶴男 選

【48・66・68・83・93・112・143・151・155・196】

井上 則子 選

【16・31・41・47・83・108・154・176・178・193】
176 入道雲ゴジラの曲で登場す

(岡村 君香)

猛暑の空に入道雲。うんざりするところだけど、なんとゴジラの曲が浮かんで来た。とどんな形だったのだろうと想像しました。

河野 洋子 選

【41・48・67・80・109・110・129・181・188・195】

赤嶺 広史 選

【21・47・67・68・80・121・137・166・173・210】

新志 光夫 選

【29・41・46・65・72・80・127・148・149・167】
29 初めてのタバコは昭和夏の雲

(稲田久美子)

今では喫煙者も随分減って来ていますが、昭和の時代は社会全体がタバコを吸っておりシネマの主人公も、かつこ良くタバコを吹かしていました。学生として上京し一番先に覚えたのは、タバコの味だった記憶が有ります。この句の季

語、夏の雲は、我々の青春の光景と良くマッチして郷愁を覚えます。

海神 瑠珂 選

【6・26・59・82・108・127・143・161・176・180】

志賀 文子 選

【1・13・56・101・122・130・132・143・156・201】
122 頬染めて割れてなるかと椿の実

(時松ヤスコ)

椿の実黒くて堅くしつかり閉じています。その実に紅色がさし、つややかです。緑の葉っぱと良く合います。割れるときをみたいです。

安部ユリ子 選

【48・62・75・130・148・149・158・165・167・187】

清末ヤヨイ 選

【1・28・37・62・79・92・101・137・155・157】
137 沸点を超えて地球の涙雨

(河野 則子)

今の地球温暖化、世界に災害を、もたらして、先行きが危ぶまれる。どころでは無い、取り返えしのつかない事が今起きている。まさにそれを詠まれている。全世界に呼びかけている、良い句ですね。

竹石 末子 選

【16・20・33・69・87・98・121・156・160・161】
87 タラの芽や小さな刺が身を守る

(安田 文)

自分におきかえてみました。小さな刺でもしつ

かりと我身をまもってくれることがたくさんあります。自分にも人としての棘があるのだと思います。

赤峰佐代子 選

【16・21・89・139・140・143・167・173・189・202】

時松ヤスコ 選

【1・49・63・68・84・115・132・147・188・201】

加藤 征孝 選

【6・10・45・49・55・66・123・152・188・206】
130 晩夏なり栞はさみしまの本

(安部スエノ)

私は本来、本を読まないのだが、文章を見てもなぜか読まないで忘れていく。いつ読んだかに思いをはせている。しかし最近気になる人といえは松本清張先生のことだろう！あの天城越えの作品は清張先生が書いた作品だが大人の作品だと思ふ。夜マント服に身をつつんで現れて来た人。今は俳句に没頭してる。

小野みち子 選

【58・84・89・150・155・160・168・180・188・208】

薬師寺裕二 選

【6・18・22・31・111・140・173・181・183・208】
140 梯梧咲くおじいの背に残る傷

(白土 正江)

梯梧はインド原産、沖縄、小笠原で栽培されている。夏の季語である。「おじいの背に残る傷」との配合で多くの住民が悲惨な最期を遂げ

た沖縄戦の傷跡を連想させる。戦後八十年を迎えようとしても、おじいの背にも、家族の背にも傷跡は、未だ癒えていない。

古後 粒勝 選

【5・22・44・64・68・130・135・172・193・209】
64 空の底抜けて雨乞い死語となる

(坂本一光)

雨乞いは早魃かんばつが続いた際、雨を降らせるため行うやや宗教的な儀礼。祈雨とも。「空の底」が抜けてしまったというのは、これまた神の罰なのか？ 異常天候を憂う作者の心情が伝わる。

御手洗豊海 選

【3・13・16・66・92・103・155・173・175・188】

安部スエノ 選

【45・85・112・122・156・169・172・188・189・196】
156 長月の空家にほつと灯が点る

(足立 町子)

田舎のこの家も空家になって久しい。九月のある夜灯りがともっている。ああ良かった！お元気だったんだ！と胸をなでおろし懐かしんでいる様子がうかがわれます。ほつとと云う言葉がとてもいいなと思えます。

幸谷 恵子 選

【1・15・18・22・71・96・139・155・167・173】
173 水打つも昨日も今日も人の来ず

(佐藤 律子)

玄関までの庭を掃き清めて来客を待つ。日本人の美しい作法。マンション暮らしですっかり

忘れていた。作者は来客の予定が無くても水を打っているだろう。来るかも知れぬ客人を迎える準備を怠らない「人の来ず」と言いながらも何か清々しさを感じる。

上田たかし 選

【1・20・21・31・60・88・108・139・181・206】
206 ひらがなで語る八月青い空

(赤峯 友子)

先の大戦中は「欲しがりません勝つまでは」の精神で、全てが重苦しい日々を過ごしていた。八月に終戦となつて、人間本来の生活に戻るため、長い時間をかけて、平和の尊さを学んで来た今日がある。上五の「ひらがなで」の導入が深みと、争いのない日々の営みを希求して止まない。心に残る句となつた。

川畑英里花 選

【9・94・101・127・143・166・189・195・201・204】
9 穀象の鳴けば母来る山河かな

(菅 攝子)

奇想天外な句だ。そもそもコクゾウムシは鳴かないが、この句では母恋のごとく鳴く。で、母は必ず飛んでくるのだ。現実の穀象は薄気味悪いが、右往左往し集団で蠢く彼らを観察している、どこか人間的に思えることも事実だ。そんなこんなで上五中七には異様な説得力がある。そして最後に「山河かな」と詠嘆で攻めてくる。ミリ単位の世界から雄大な光景に着地する。なにやら自然の摂理を言われたように納得し、感動まで覚えたのである。

鎌倉真由美 選

【40・47・58・89・127・140・142・152・189・200】
40 春昼や母につながれ黒電話

(本田 圭子)

私の家にも、少しほこりをのせた黒電話が座敷の角にあります。春の日ざしの暖かい昼間、開け放った部屋の角のレトロな黒電話を目にすると、受話器を握り話すお母様の姿を思い起されたのでしょうか？黒電話がとてもいい。私も黒電話を耳に当てると、もしかして母の声が…。

本田 圭子 選

【21・48・110・111・128・140・193・196・206・210】

安田 文 選

【39・41・69・97・105・124・139・160・188・189】

160 納得の胸にストンと心太

(赤嶺 広史)

納得いかず重苦しいモヤモヤとした気持がほどけた時…。暑い夏にはもってこいの心太、その喉越の良いい心太が胃の中へスルリと落ちてゆき心も体も涼やかになる様子と重なり言葉端的に詠まれていて素晴らしい句だと思いました。

甲斐加代子 選

【21・103・122・132・143・166・180・188・200・201】

吾 亦 紅 選

【22・29・64・72・89・128・130・151・188・189】

森山 秀子 選

【19・31・54・71・90・105・110・147・185・186】

岡村 君香 選

【47・67・83・133・139・151・160・180・188・210】
47 敗戦忌生きてる者は爪を切る

(神 慶子)

8月15日の終戦記念日。戦争で亡くなった人を偲びながらも、生き残った自分は伸びた爪を切っている。生きて入れば爪は伸びる。そこには日常の延長である「生」がある。「生」と「死」の対比。「爪を切る」という下五から何気ない生活の中の命の営みの大切さを感じる。

時松由美子 選

【6・16・67・117・122・133・135・201・204・210】

122 頬染めて割れてなるかと椿の実

(時松ヤスコ)

大変おもしろい句。私の家も椿の実が良く出ます。頬を赤くして頑張っているようすがみえます。少しゆだんをすると、割れて種は落ちます。ほほを赤くして割れてなるかといって頑張っている様子が見えたところがおもしろいです。楽しい句でした。

川西 達子 選

【1・36・80・137・155・158・174・183・206・208】

158 草取りて生涯現役白寿の手

(大村 和代)

人生百年時代と言われる世となりました。役に立つ仕事が出来る白寿の手。草を取りながらつくづくわが手をながめ、まだ出来る。生涯現役の意を強くしたのでした。

高橋 玲子 選

【1・22・84・96・98・137・189・206・208・210】
22 産み立ての卵の温み終戦日

(宮川三保子)

温みの捉えかたはそれぞれであると思う。戦地で全身全霊で戦っていた半信半疑の温み、戦時を生き抜いた家族や国民の安堵の温み。八月十五日というひと日の日本国民の心情の深さを生み立ての卵の温みと表現した上手さに共鳴しました。そして戦争の被害国を増やしてはいけないと再確認をした一句です。

赤峯 友子 選

【19・21・22・38・47・72・79・170・194・195】
19 爪紅やもう帰らないロバのパン

(足立 攝)

「ロバのパン」の歌を流しながら、本物のロバが車を引いてパンを売りに来ていた。なつかしい昭和の景である。歌が聞こえるとワクワクして駆け寄った。そのうちロバではなく車での販売となったが、あのパンの味は今も覚えている。美味しかった。少し触れただけで弾ける鳳仙花に心弾ませたように、思い出すと心が弾む。弾けた鳳仙花はもう帰らない。もう帰らないあの頃がなつかしい。

佐々木 玉 選

【5・38・41・71・80・83・120・158・167・180】
80 美しきひかりの殺意蜘蛛の糸

(高橋 玲子)

蜘蛛の巣に、雨上がりや朝露の時真珠のような雫が綺麗に浮かびあがります。それに獲物が

掛かってしまったら身動きがとれません。殺意を感じます。それを上手に纏めて俳句にしています。私は苦手なクモですが、やっぱり一番気になりました。

菅 勲 選

【1・13・28・67・70・117・134・171・173・204】
67夜学子や母が背を押すにぎりめし

(豊國 隆信)

夜学ぶ子に母が声をかけ送り出すのみでなく、夜食のおにぎりをそつとカバンに入れている姿は、母の愛の深さと子供への将来の希望の深さが感じられました。

竹下美津子 選

【15・18・31・79・132・143・160・161・192・211】

山本悦子 選

【20・21・46・48・91・102・128・134・151・155】

林 香澄 選

【37・40・62・63・109・113・127・136・176・180】

有永真理子 選

【1・47・64・72・93・108・150・151・158・175】
47敗戦忌生きてる者は爪を切る

(神 慶子)

当然のことだが、生きている体は刻々と新陳代謝しており死者にはそれがない。敗戦忌の日、戦禍で亡くなった(命)数百万人の人々に思いを馳せ、今生きている(生かされている)ことの重みを「爪を切る」で表現している。作者の

繊細な心の動きと深い思いが伝わってくる。

加納 知子 選

【20・22・38・69・136・140・167・176・189・207】
20蓼の花わが半生は風の中

(足立 攝)

どの人にもその人だけの人生があります。富む人にも、貧しい人にも。丈夫な人にも弱い人にも。その人だけのその時々風の風が吹いています。強風も弱風も、温い風も冷たい風も、人は皆、折々の風とともに暮しているように思います。蓼のような小さな花にも、それなりの風があるように思います。明日は順風でありますように。

大下真理子 選

【3・38・48・92・93・101・127・179・185・193】
92雲の峰棚田は天に行き止る

(河野 洋子)

「天に行き止る」の措辞に惹かれました。ぐんぐん伸びていく棚田の稲の生命力に圧倒されます。雲の白、背景の青、棚田の緑。生き生きとした風景が美しく描かれています。作者の生き様まで思い描く事ができました。

足立 町子 選

【15・20・41・60・72・92・110・139・176・178】
176入道雲ゴジラの曲で登場す

(岡村 君香)

初代ゴジラを東宝が公開したのは1954年でした。ビキニ島の核実験によって起きた第五福竜丸事件がきっかけです。映画では、人間が

生み出した核の恐怖の象徴としてゴジラが描かれています。七十年前の事です。ゴジラは人類に警鐘を鳴らすという存在になっています。ゴジラは人間を賢くすることが出来るのでしょうか。ゴジラは人間と共存することが出来るのでしょうか。ワクワクします。

白土 正江 選

【19・41・47・65・83・100・129・143・193・210】
129だんだんと透きとおっていく秋の耳

(小野みち子)

秋の澄んだ空気の中にいると、いろんな物音に耳は聴くなります。ちよつとした風の葉ずれの音や木の葉に当たる雨音など何もかも心が内に向かう季節だから敏感になるのですね。この句には具体的なものは、書いてないですが「だんだんと」「透きとおっていく」「秋の耳」という言葉の流れが、秋の季節の深化を示しその深化をうけとめている耳という表現となつてすーとやさしく入ってきました。秋の季節にあつたいい句だと思います。

石橋紀公子 選

【22・72・74・83・98・129・180・205・206・208】
22産みたての卵の温み終戦日

(宮川三保子)

放し飼いの鶏は庭先のあちこちで卵を産む。朝食の前に探し出して、その温もりを食卓に届けるのは幼い頃の私の仕事だった。終戦日の開放感や安堵の中の家族の団欒は私には想像の中の出来事である。掲句は産みたての卵と、終戦日という不思議な取り合わせだが、妙に納得し

てしまった。

有村 王志 選

【22・38・41・82・85・98・103・134・188・196】
85 汗かいて汗かいてこそ一生涯

(安田 文)

生涯、汗を流しながら、地域、職場、家庭などあらゆるところ、リフレインが効果を發揮しており、一生懸命に生き続ける人間の有様が窺える。この他には41番の「言い返す言葉呑み込み蜜柑むく(本田圭子)」の無言で伏し目がちに蜜柑を剥いている姿が鮮明である。

夢野はる香 選

【38・67・74・101・109・127・129・152・178・206】

國廣 精膳

【13・54・79・104・105・106・107・132・155・179】
179 行く夏の声を溜めてる廃校舎

(上田たかし)

「俳句は人生の杖」とも言われている。この

協会年度「自薦作品」選句対象作品

※自薦作品は年三度の通信句会の中で、唯一作者名が分かった上で選句するルールになっています。伏せてある方が選句しやすいのは当然ですが(事実事務局にはその訴えが毎回届きます)、俳句世界ではそうならないこともたくさんあります。その訓練だと前向きに捉えてください。コツは徹頭徹尾作者名を無視すること、これに尽きます。

句の「行く夏の声を溜めてる」という上五と中七の取り合わせがよいかと思う。年をとつていく自分と過疎化が進む地方。かつて子どもの声がして賑わっていたであろう廃校になった学校。人生や時代の流れの中で、廃校舎を見て、古き良き時代を溜めてるように思えたのであろう。また、故郷への郷愁と今以上、廃れないでほしいという今の想いが感じられるよい句と思う。

児玉 利子 選

【1・3・16・118・166・191・194・197・209・210】

安森 範明 選

【24・31・55・70・117・139・172・173・196・210】
172 夕焼やしやがむ母の背かけ込む子

(佐藤 律子)

現代は、背負っている親は見た事がないが昔は、皆おんぶをして背に子供がいた。今は、だっこして前にいる。なつかしい状況で、童謡の世界だ。夕焼が効いている。

1 用終へし装具冷たき爆心地	牧野 桂一
2 難民の一家聖樹に星揚げ	牧野 桂一
3 シーソーのふわり子の靴冬木の芽	牧野 桂一
4 砲声や由布の裾野に若菜摘む	牧野 桂一
5 三女らに白く囁く春の風	菅 攝子
6 野薊の昼を点せば愛山河	菅 攝子
7 花豆に風の一言ぶら下がる	菅 攝子
8 三葉芹摘めば新たな風になる	菅 攝子

9 年女暦の白蛇動き出す	宮川三保子
10 冬ざれや杭に鴉の思案顔	宮川三保子
11 音読の一人芝居や室の花	宮川三保子
12 春の空絵本の蝶を放ちやる	宮川三保子
13 十七の初キス浅春の目眩	佐藤 優美
14 過激派の君の冤罪冬木の芽	佐藤 優美
15 ミヤンマーに届け! 平和の冬薔薇	佐藤 優美
16 粉雪に同化してゆく修行僧	佐藤 優美
17 おごそかにいちよう落葉の交響曲	生野 義晴
18 まほろばのははの愛した石路の花	生野 義晴
19 煮凝や質素に生きた母の過去	生野 義晴
20 ファイナルの第九を惜しむ年の暮れ	生野 義晴
21 点滴が心音となる聖夜かな	足立 攝
22 旅に疲れて辛夷の花も風の中	足立 攝
23 未整理の父の遺品に棲む寒気	足立 攝
24 百三十八億年の日向ぼこ	足立 攝
25 何もかも奇跡に見ゆる初明り	菅 登貴子
26 水仙の並びし記憶里の駅	菅 登貴子
27 日影さえ愛しく思う春散歩	菅 登貴子
28 制服の裾膨らみて沈丁花	菅 登貴子
29 自衛にも敵地攻撃大枯野	下司 正昭
30 愚かなる汝の路はこの吹雪	下司 正昭
31 虎落笛過ぎゆく時を研ぎ澄ます	下司 正昭
32 鰯雲言葉真理の深みから	下司 正昭
33 会釈して通り過ぎるや秋夕焼	永松左世美
34 賀状には三つ子男の子の並びおり	永松左世美
35 口ずさむ懐メロキッチン明けて春	永松左世美
36 陽炎と共にステップ吾子二人	永松左世美
37 元旦や鬼門を静め琴の爪	河野 則子
38 恵方巻芯まで届かぬ恩返し	河野 則子
39 念仏を唱える間に失せ冬の虹	河野 則子
40 六郷の山肌照らし初夕日	河野 則子

大分県俳協 第一回雑詠句会 Ⅱ 作品募集Ⅱ

※大分県現代俳句協会では、内部の勉強会として年三回の通信句会を開催しています。今回募集する

「第一回雑詠句会」はその中の一つで、会員なら誰でも無料で応募できます。（投句は会員だけです）
が、選句は会員外もOKです。選に幅を持たせるため、他団体に選句を要請することもあります。

※一人三句。この勉強会に未発表のもので、なるべく当季（今ごろの季節）のものをご応募ください。

この制度は会員の勉強のためにあるので、昔の作品を「他会員に問う」というものでも構いません。
※作品は自動的に「年間一句賞」の対象になります。（年間一句賞は総会で表彰します）

※締切は六月二十日（金）です。九州俳句大会など、他の協会事務と重ならないように「早めの投句」
にご協力ください。なおこの締切は、自薦作品の選句選評の締切と同じ日になっています。

※送り先は事務局（〒879-7151大分県豊後大野市三重町西泉436足立攝方 FAX 0974-22-3749）
※同封のFAX用紙でお近くのコンビニからお送りくださると便利です。送り方は「コンビニにおたずね
ください。その他、郵送やメールなど、読めさえすれば形式にはこだわりません。

41デモクラシー生死は不自由敬老日	河野 輝暉
42鬼門を祓い葱だけ残す畠仕舞	河野 輝暉
43諦めも理性のひとつ草の花	河野 輝暉
44桃の種投ぐるや海は女かな	河野 輝暉
45山茶花のはしやぐ小径を寂しがる	神 慶子
46待つことを今に覚えて寒椿	神 慶子
47幸せのぎゅつと詰まったシクラメン	神 慶子
48生きているのに倦きてコホンと咳をする	神 慶子
49冬休み対話邪魔する子のスマホ	岡野 絃宣
50気まじめな父のこさえた福笑	岡野 絃宣
51 ^{みどり} 嬰兒が主役となりし二十歳の日	岡野 絃宣
52ターザンも取れぬ高さに烏瓜	岡野 絃宣
53猫じやらし婆をくすくす二ツの子	内田トシ子
54初鏡亡母の面影紅をさし	内田トシ子
55秋夕焼はちみつ色に星染めし	内田トシ子
56露草や涙きらりと零れ落つ	内田トシ子
57風花やわたしに降りる駅がない	立花眞由美

58開戦忌昭和のノイズ漂流す	立花眞由美
59狂ひぬくほどの過去なく古ひひな	立花眞由美
60桃啜るはは羊水に遊ぶわれ	立花眞由美
61疎きこと丸くのみこみ日記果つ	天田 泉美
62寒紅や短かき文に封をする	天田 泉美
63箸紙の中から福が顔をだす	天田 泉美
64極月の隅っこにゐる幸と逢ふ	天田 泉美
65物置に凍えて眠るブルタニカ	藤 万 葉
66冬菫よく陽のあたる墓の裏	藤 万 葉
67除夜詣戦禍の子らは飢餓のまま	藤 万 葉
68寒椿ころをひらくふりをして	藤 万 葉
69赤茶けた色優しくて山眠る	佐藤 次江
70皺ひとつ増えて新年これもよし	佐藤 次江
71元朝や鳥待つ窓辺孫の笑み	佐藤 次江
72なんという空の清しさお元日	佐藤 次江
73高令化減りゆく年賀いつかゼロ	大神 愛子
74巨大マグロ男の底意地惚れるワザ	大神 愛子

75寒いねメダカの動き鈍い訳	大神 愛子
76お年玉今年で終わり奮発す	大神 愛子
77人間も神も試作の冬の星	坂本 一光
78万円に従う不屈冬の水	坂本 一光
79降る雪や世界はかくも美しき	坂本 一光
80あれこれの思い句にして春まぢか	坂本 一光
81落し穴ハマリ双六五個戻る	高倉 直人
82背中から火の立ち昇るドンド焼	高倉 直人
83凍鶴の一万フィートの翼かな	高倉 直人
84生かされて生きて悔いなし桃の花	高倉 直人
85庭あれば柚子一本でもあればいい	早澤まり子
86名月や招待席でお待ちします	早澤まり子
87グッドバイ肩ごしの手に春夕日	早澤まり子
88歳時記のページが重い目借時	早澤まり子
89北を向く渡り鳥にもある国境	足立 鶴男
90晦日蕎麦食べて為政を激論す	足立 鶴男
91大晦日諸行無常の鐘の音	足立 鶴男
92雑煮食う忍び寄る老い吹き飛ばし	足立 鶴男
93ため息もからりと抜けて冬木立	井上 則子
94自己主張してもいいのよ冬苺	井上 則子
95竹林によわき風あり二月尽	井上 則子
96初午や形見の袖かけてみる	井上 則子
97故郷や呼んで届かぬ冬の月	田代 直之
98湯豆腐の中に真実沸々と	田代 直之
99ポリープの全身麻酔山眠る	田代 直之
100炬燵猫そろそろ狩りの時間です	田代 直之
101峡の村梅一輪に始まりぬ	河野 洋子
102筆はじめ真白き紙に置く言葉	河野 洋子
103スケボーの少年が舞ふ初みそら	河野 洋子
104不意打のくしゃみに飛びし記憶かな	河野 洋子
105生コンに八月の陽を叩き込む	赤嶺 広史
106主語のない貴方の言葉秋日和	赤嶺 広史

137	冬の光雲の谷間に七色よ	時松ヤスコ
136	元朝や深呼吸せり九重山	赤峰佐代子
135	いつまでも葬の白菊香りおり	赤峰佐代子
134	枇杷の花間遠になりし友の笑み	赤峰佐代子
133	他人 ^{ひと} 事にしないと誓う12・8	赤峰佐代子
132	鍋ぶたの音ことと年暮るる	竹石 末子
131	寒紅をうすく八十路の小豆飯	竹石 末子
130	旧姓を呼ばれふり向く年の市	竹石 末子
129	年毎の涙もろさよぼたん雪	竹石 末子
128	万両は季節を知りて類染めて	清末ヤヨイ
127	四方の春花開くかや句詠めば	清末ヤヨイ
126	わが心大寒に入る母逝きて	清末ヤヨイ
125	寒林はきびしき耐えて年輪を	清末ヤヨイ
124	鬼が舞い火の粉飛びちり春近し	安部ユリ子
123	かすかなり旋律否や小夜時雨	安部ユリ子
122	古雑誌束を抜けだし春を知る	安部ユリ子
121	静寂や目映いほどに寒の月	安部ユリ子
120	年用意江戸紫ののぼり幟	志賀 文子
119	初春や歩みはじめた足力	志賀 文子
118	箱根路やたすきを渡す笑顔あり	志賀 文子
117	初詣神の導き朋の笑み	志賀 文子
116	春遠し山の他無し山の中	海神 瑠珂
115	馬鹿野郎オレオレ詐欺の初電話	海神 瑠珂
114	復刻せしスープ餃子や寒厳し	海神 瑠珂
113	雪雪雪神奔放の水墨画	海神 瑠珂
112	CTに確 ^{しか} と病巣 ^{しこ} 冴え返る	新志 光夫
111	草萌える津波避難の丘に座し	新志 光夫
110	駆け抜けしこの七十路に余寒ふと	新志 光夫
109	菩提寺に村の来歴大冬木	新志 光夫
108	初夢の母が差し出すだんご汁	赤嶺 広史
107	八月の灰汁が上手に掬えない	赤嶺 広史
138	笑い初め猫のあくびで撮る写真	時松ヤスコ
139	満作の花びら踊り湯けむりよ	時松ヤスコ
140	蕾待つ日課の日記福寿草	時松ヤスコ
141	ポケットがちよっと寒い冬田舎	加藤 征孝
142	春の音や一段と寂しい今日の旗じるし	加藤 征孝
143	平和とて平和外交呼び覚ます	加藤 征孝
144	蝮が家に入りたがってるよ!	加藤 征孝
145	注文の多いわが犬秋の夕暮れ	小野みち子
146	秋の月まん丸はちと恥ずかしい	小野みち子
147	天高し今日の気分はK-POP	小野みち子
148	輝に時々からむ糸がある	小野みち子
149	木犀の香り漂う母の家	小川 良子
150	紫陽花や六歩で渡る神の橋	小川 良子
151	賀状書く一人一人の顔浮かべ	小川 良子
152	終活や大樹を伐つて涼むかな	有村 王志
153	立っている我も一景冬の村	有村 王志
154	寒椿思案の形に落ちるかな	有村 王志
155	手のひらは無限の自由零余子落つ	有村 王志
156	送り火の残してゆくや足の冷え	薬師寺裕二
157	母なれや門火の影の虫の声	薬師寺裕二
158	かんざしに秋風ふるる祇園かな	薬師寺裕二
159	冬紅葉雪降りつつも朱を残し	薬師寺裕二
160	十兆円重さ百トン着ぶくれる	古後 粒勝
161	築三百国宝級の寒さかな	古後 粒勝
162	ボクの名を何故か知ってるサンタさん	古後 粒勝
163	セルフ・パークション正月三日かな	古後 粒勝
164	軽トラに瓦礫を積んだまま師走	足立 町子
165	躓いて北風の尾にしがみつく	足立 町子
166	子が転び今朝の淑気が破られる	足立 町子
167	山茶花のどこへ散っても母の胸	足立 町子
168	鍵穴を覗く初日を受け入れる	上田たかし
169	着ぶくれてことばを捨てていく園児	上田たかし
170	葉牡丹が喜怒哀楽を紡ぎゆく	上田たかし
171	凍雲に抱かれる村の息づかい	上田たかし
172	初夢の母に尋ねしエトセトラ	幸谷 恵子
173	寄鍋の湯気に胸中和みけり	幸谷 恵子
174	春着の子豆腐配りの父を待つ	幸谷 恵子
175	初夢の天駆け巡る鳳凰よ	幸谷 恵子
176	泰然と師走の中に放屁する	鎌倉真由美
177	寒紅や私のにおい忘れたでしょ	鎌倉真由美
178	キューポラのある街あたり冬ざるる	鎌倉真由美
179	石のごと男がひとり冬の耕	鎌倉真由美
180	十五夜やこの街をみな供花として	本田 圭子
181	鴛色の彼岸花我等少数派	本田 圭子
182	除夜の鐘母のレシピの胡麻豆腐	本田 圭子
183	凍空やもうすぐドクターヘリが来る	本田 圭子
184	産声の轟く医院福寿草	安田 文
185	軽やかな稚児の足取り今朝の春	安田 文
186	頑なな夫の心と日向ぼこ	安田 文
187	習わしや骨まるごとの小殿原	安田 文
188	菜の花に染まる一色フアンタジ	吾 亦 紅
189	鳥低く飛び行く空の雪催ひ	吾 亦 紅
190	待春の生木くすぶる煙かな	吾 亦 紅
191	春を待つ五百羅漢のささめごと	吾 亦 紅
192	歩かねば歩けなくなる柿日和	時松由美子
193	身の細る恋など出来ぬ着ぶくれて	時松由美子
194	青き踏みゆつくり歩くわが歩幅	時松由美子
195	日記にも本音をはぶく余寒かな	時松由美子
196	亡き夫は夏の海へとまっしぐら	森山 秀子
197	虫の音やゆつくり歩く下駄の街	森山 秀子
198	萩刈られ金色の日を賜はりぬ	森山 秀子
199	生きているだけがもうけもん春の朝	森山 秀子

227	コーヒーにマシユマロ二つ寒四郎	佐々木 玉
226	冬の蚊がするりとバスに乗り込みぬ	佐々木 玉
225	玄関の置き配に添う柿落葉	佐々木 玉
224	着ぶくれの三頭身の園児たち	佐々木 玉
223	氏神の絵馬がカランと淑気かな	赤峯 友子
222	晩年はこの道と決め竜の玉	赤峯 友子
221	反抗期の穴から覗く冬の空	赤峯 友子
220	草木の枯れる音して芭蕉句碑	赤峯 友子
219	本当は孤独なのかな寒鴉	高橋 玲子
218	母が居たあの日の朝や今日は雪	高橋 玲子
217	わが顔に誓うことあり初鏡	高橋 玲子
216	独りにはひとりの至福冬満月	高橋 玲子
215	金風やいま忘るまじ平和賞	竹下美津子
214	うどんにも優等生の寒卵	竹下美津子
213	芋を焼く焦げ臭風を乗りこなす	竹下美津子
212	とくとくとお湯飲む湯たんぽ友になる	竹下美津子
211	枯れてゆく未元のままにたくましく	御手洗豊海
210	少年の気合天まで寒の明け	御手洗豊海
209	梅咲いて限界村も動きだし	御手洗豊海
208	咳一つ残して老師席を立ち	御手洗豊海
207	桜咲く届かぬ地球の裏おもて	甲斐加代子
206	帰省子はあうんの呼吸雪見酒	甲斐加代子
205	初日差す碑文字に残る師の一語	甲斐加代子
204	埋もれゆく昭和彷徨今朝の雪	甲斐加代子
203	葉牡丹の彩それぞれに母卒寿	岡村 君香
202	鏡餅パックの中から見る世相	岡村 君香
201	木枯やどうすりやいいのセルフレジ	岡村 君香
200	古希にして半農半遊冬日和	岡村 君香
228	台風過やぶれ芭蕉に身を写す	菅 勲
229	秋遍路心の闇を一つ捨つ	菅 勲
230	運動会開会の声天をつく	菅 勲
231	校の香りに押され旅はじめ	菅 勲
232	一月や夫なき月日重ねたる	川西 達子
233	七度の干支めぐり来て年明ける	川西 達子
234	図書館へすべて返して冬銀河	川西 達子
235	大寒の仔牛の太き瞳澄む	川西 達子
236	心込め自動車を拭く年の暮	安森 範明
237	飛石を渡る園児ら小春かな	安森 範明
238	和太鼓や腹にずしりと秋の雲	安森 範明
239	幕を閉ず第九を歌う師走かな	安森 範明
240	ぼくカレー！声をそろえる三日かな	有永真理子
241	平穩を祈る両手に初日射す	有永真理子
242	諸天をくすつと笑う中二の娘	有永真理子
243	秋天を二両列車が横切れり	有永真理子
244	春隣りこんなところにかめ虫が	加納 知子
245	日向ぼこ渋沢さんが頬かむり	加納 知子
246	みかんむく奥能登にそつとふたをして	加納 知子
247	黒岳の初冠雪よ世にあらず	加納 知子
248	お正月三半規管が音をあげる	稲田久美子
249	木枯でたどるリストの狂詩曲	稲田久美子
250	手袋をしてリユーマチの手を隠す	稲田久美子
251	あの実は……の次が言えずに剥く蜜柑	稲田久美子
252	冬さざる大人のイソップ間に合わぬ	林 香澄
253	嘘真実まもなく歴史春よ来い	林 香澄
254	冬薔薇や芽吹きのおく嘘の無し	林 香澄
255	さよならしませんが年賀仕舞に返し有り	林 香澄
256	ループルの文化吸いこむ春隣	白土 正江
257	風花が舞う古里を後にして	白土 正江
258	折れかけた少女励ます寒緋桜	白土 正江
259	枯れゆくものに鬱の日の乳房	白土 正江
260	蘇るノートルダムに冬の月	石橋紀公子
261	子を抱く狍犬見つめる千代の春	石橋紀公子
262	母が愛した紅梅咲いて母遠し	石橋紀公子
263	木の葉舞うかごめかごめの児らに舞う	石橋紀公子
264	声優し初めて撞くや除夜の鐘	國廣 精膳
265	花びらが落ちて小道の椿かな	國廣 精膳
266	蠟梅や手押し車の母見上ぐ	國廣 精膳
267	屠蘇片手震災語る三十年	國廣 精膳
268	人柄がそのまま文字に賀状来る	児玉 利子
269	独り居の初風ヨハンシユトラウス	児玉 利子
270	あのときの手袋いまも捨てられず	児玉 利子
271	もの言わぬ地球の受難山眠る	児玉 利子
272	地球アラートどんぐりを備蓄せよ	川畑英里花
273	秋水に絵筆洗えば自我の色	川畑英里花
274	言の葉も除菌され病棟凍つる	川畑英里花
275	基督の欠片もなくて年の暮	川畑英里花
276	正月も世界の中でガザは泣く	佐藤 哲夫
277	北風に詩吟を唸る露天の湯	佐藤 哲夫
278	門松を片づけ日々の暮らしか	佐藤 哲夫
279	白味噌赤味噌雑煮の論点定まらず	佐藤 哲夫

※選句、選評の要領は次ページに
(以上)

279句から10句の選と選評をお願いします

◆今回の選句は、作者名が分かる自薦作品です。作者名が分かること、一人三句ではなく四句であることを除けば前回の雑詠句会と同じです。

◆前ページまでの279句の中から10句を選び「選句」、その中の気になった1句に二百字程度の「選評」を書いてください。選評は短くても、長くても、または書かなくてもかまいません。書けば必ず句会報に掲載されます。

◆選句・選評には会員以外の方も参加できます。当協会は俳句の多様性を尊重しています。なるべく多方面の方からご意見をうかがえれば、私たちにとって勉強になり同時に刺激にもなります。条件の許す方は、ぜひ選句・選評に参加され、ご指導くださるようお願いいたします。

◆選句は番号の若い順に並べてください。番号を順不同に書くとは事務局の手間が増え、それだけ間違ふ可能性が大きくなります。ただし、用紙を汚してまで書き直す必要はありません。

◆作品番号だけでなく、間違いを防ぐために上五もお書きください。事務局を八年やっていいますが、作品番号と上五が全句に渡って一致したことはほとんどありません。

◆当たり前のことですが、ご自身の名前もお忘れなく。二、三回に一度くらいお名前の記入のない人がいます。それで前々回から同封の投句用紙の名前の位置を変更しました。

◆選句・選評の締切は6月20日（金）です。13ページ「囲み記事」の「第一回雑詠句会」の投句締切日と同じです。

◆今回に限らず事務局は、できるだけ会員のみなさんの融通を利かせます。締切日を過ぎて「しまった」と思ったときは、あきらめずに一度ご相談ください。印刷の都合で間に合わないときもあります。一週間ほどの猶予があるときもあります。（これは事前に分かりません）

◆同封の選句用紙を使うと、どここのコンビニのファックスからでも、ほとんど50円で送れます。使い方はコンビニにおたずねください。

◆事務局でも実際にコンビニファックスを試してみました。セブイレブン、ローソン、ファミマなど複数店を試しましたが、どこも新型のマルチコピー機が設置してあって、画面の指示通りに操作すれば、驚くほど簡単に送れます。

◆郵便の配達が遅くなり、料金も大幅に高くなつた今では、コンビニファックスをもっと見直してもよいのではないのでしょうか。「安い」「速い」のコンビニファックスをぜひ一度お試しください。思ったよりずっと簡単で快適です。

◆ご自宅のファックスでも送信可能ですが、筋が入って読みづらかったり、ローラーの吸い込みが悪く、簡単な原稿が二枚に及ぶことが多発しています。ご自宅FAXの調子が完全でないときは、一度、電気屋さんにご相談してみてください。案外簡単に直るかもしれません。

◆ファックスで送る場合の一般的注意として、エンピツ等の字の薄いもの、カスレのあるものはお避けください。正確に受信出来ません。原稿はなるべく大きな字で濃くお書きください。

百均で2本セットで買えるラッシオンペンなどがおすすめです。

◆作品や選評などで、誤字脱字や読みにくい文字がたくさん見受けられます。事務局では簡単にボツにせず何と読み解こうとするため、五倍も十倍も時間がかかります。「中学生でも判読できる原稿」にご協力ください。

◆新会員が増えてきています。お近くに新会員がいる方はぜひお声をかけて、一緒に投句や選句ができるように呼びかけてください。



大分県現代俳句協会

OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長 有村王志



《事務局》

〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436
足立 攝 方

TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481

URL: <http://www.gendaihaiku.net>

E-Mail: info@gendaihaiku.net